

自分の考えを論述できる児童の育成

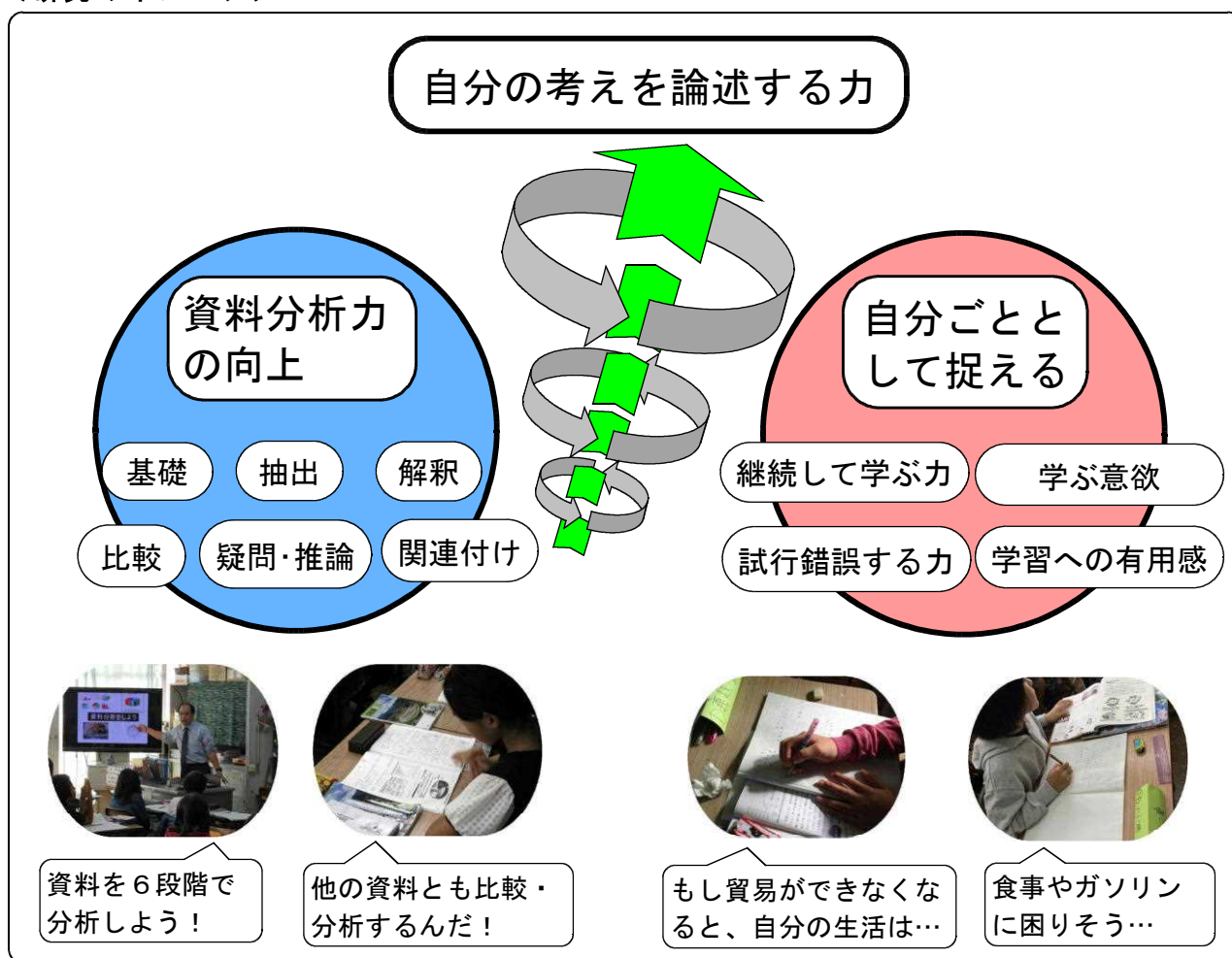
～ 資料の多面的・多角的な分析から自分ごとへつなげる学習活動の工夫 ～

那覇市立仲井真小学校 新垣 清

<研究の概要>

小学校社会科では、「各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること、社会的事象の意味、意義を解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述すること」等が重視されている。このねらいを達成するため、本研究では「6段階資料分析」を活用した資料分析力の向上と、社会的事象を自分ごととして捉え、自分の考えを論述できる児童の育成に視点を置いた取り組みを、実践を通して検証した。

<研究のイメージ>



<研究の成果>

- 「6段階資料分析」を活用することで資料分析力が向上し、社会的事象を多面的・多角的に捉え、自分の考えを論述することができるようになった。
- 社会的事象を自分ごととして捉える学習を行ったことで、社会的事象と自分を関連づけた捉えが深まり、自分の考えを論述することができるようになった。

目 次

I	テーマ設定の理由	41
II	研究目標	41
III	研究仮説	41
1	基本仮説	
2	作業仮説	
IV	研究構想図	42
V	研究内容	42
1	資料分析について	
(1)	資料分析の過程について	
(2)	資料分析における記述の視点について	
2	社会的事象を自分ごととして捉える活動について	
(1)	社会的事象を自分ごととして捉えるとは	
(2)	社会的事象を自分ごととして捉えさせる学習について	
①	社会的事象と自分とのつながりを意識させる学習について	
②	相互交流を通じた学び合いと自分ごとについて	
VI	授業実践(第5学年)	45
1	単元名「大単元3 工業生産を支える人々」 「小単元2 世界につながる日本の工業」	
2	単元の目標	
3	指導計画(全5時)	
4	本時の目標	
5	授業仮説	
6	本時の展開(5/5)	
VII	結果と考察	46
1	作業仮説1の検証	
	【結果】【考察】	
2	作業仮説2の検証	
	【結果】【考察】	
VIII	研究の成果と課題	48
1	成果	
2	課題	
	＜主な引用文献と資料＞	

自分の考えを論述できる児童の育成 ～資料の多面的・多角的な分析から自分ごとへつなげる学習活動の工夫～

那覇市立仲井真小学校 新垣 清

I テーマ設定の理由

小学校学習指導要領解説社会編には、「各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること、社会的事象の意味、意義を解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述することを一層重視する。」とある。これは、資料の多面的・多角的な読み取り、活用、表現など、今後求められる学力観を示していると思われる。

これまでのOECDによるPISA調査などの結果から、日本の子ども達は思考力・判断力・表現力を問う読解力、知識・技能を活用する問題に課題があること、自由記述問題での無回答率が高いことや学習意欲に関する数値が低いという現状が報告された。

本学級で行ったアンケートでは、「メディアで知ったことを自分では詳しく調べない(76%)」、「発表することが苦手(59%)」、「自分の考えを説明することが苦手(47%)」などの結果が見られ、事象を多面的・多角的に追究することや考えを論述することに課題があることが分かった。

同じく資料分析に関する質問でも、「資料を発表の根拠とするのが苦手(71%)」、「資料の価値を読み取るとは難しい(62%)」、「疑問や予想を立てられない(44%)」、「情報抽出が得意ではない(41%)」という回答結果となり、資料分析における課題が確認できた。特に「資料と自分の関係」について、日頃考えたことがないと回答した児童は50%で、社会的事象を自分ごととして捉えきれていないという実態が見られた。

以上のことから、社会的事象を自分ごととして捉えさせ、資料の確実な読み取りと多面的・多角的な分析の方法を指導することで、自分の考えや調べたことを論述できる児童の育成が図れると考え本テーマを設定した。

II 研究目標

自分の考えを論述できる児童の育成を目指し、資料の多面的・多角的な分析から自分ごとへとつなげる学習活動の工夫についての研究を行う。

III 研究仮説

1 基本仮説

資料読み取りの場において、資料分析から自分ごとへとつなげる学習指導の工夫をすることにより、自分の考えを論述できる児童を育むことができるであろう。

2 作業仮説

(1) 資料読み取りの場において、資料分析の視点を明確化することにより、資料を多面的・多角的に捉え、自分の考えを記述することができるであろう。

(2) 社会的事象を捉える場において、児童に自分とのつながりを段階的に考察させ、次に相互交流の場を設定することで、社会的事象を自分ごととして捉え論述できるであろう。

IV 研究構想図



V 研究内容

1 資料分析について

(1) 資料分析の過程について

学習指導要領解説社会編には，「地図や統計など各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること，社会的事象の意味，意義を解釈すること，事象の特色や事象間の関連を説明すること，自分の考えを論述することを一層重視する方向で改善を図る」とある。

また，第5学年の能力に関する目標にも「各種の基礎的資料を効果的に活用し，社会的事象の意味について考える力，調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする」とあり，学習を通して学んだ知識を活用したり，根拠を基に論述できる児童の育成を重視していることがうかがえる。

この「各種の基礎的資料を効果的に活用する」という児童の活動の支えとなるのは各資料の正確な読み取り，つまり「資料分析力」であると思われる。

米田(2009)は、学習指導要領解説社会編における「言語力」を、①読み取り・②解釈・③説明・④論述の4段階の構造で表している。

本研究ではこの理論を参考とし、読み取り段階の細分化と多面的・多角的な分析の視点を加え、資料分析の過程を、「①基礎、②抽出、③解釈、④関連付け、⑤疑問・推論、⑥比較」に再編した6段階資料分析に取り組んでいく(表1)。

この6段階資料分析を丁寧に行わせることで、その後の論述活動の基盤とする。6段階資料分析は、教科書の全資料で行うのではなく、必要な資料に絞り、6段階全ての分析が難しいものは必要な段階だけを実施することとする。

(表1)「6段階資料分析」

段 階		児童の学習内容
1	基礎	資料の基礎事実の正確な読み取り
2	抽出	資料のデータなど、様々な情報の抽出
3	解釈	資料のねらいを読み解く
4	関連付け	資料の関連づけ(既習事項や実体験に基づく)
5	疑問・推論	疑問を持ち、推論する(既習事項や実体験に基づく)
6	比較	他の資料と比較する

【筆者作成】

(2) 資料分析における記述の視点について

学習指導要領解説社会編では「調べたことや考えたことを表現する力」の具体的な内容として、「根拠や解釈を示しながら図や文章などで表現し説明すること」と示している。児童にこのような力をつけさせるためには、資料を正確に読み取り、そこから得た知識や考えたことなどを丁寧に記述し、それを裏付けとした論述へとつなげる学習過程が重要だと考える。

そこで米田(2009)の示した言語活動の内容を参考にして「各段階の読み取り内容と記述の視点」(表2)を作成した。児童に資料分析の各段階ごとの具体的な読み取り内容と記述の視点を与えることで、資料の正確な読み取りと記述を確実に行わせ、児童の論述の根拠とさせる。

(表2) 各段階の読み取り内容と記述の視点

段階		統計資料	写真・イラスト	文章
1	基礎	○資料名 ○資料の出典年代 ○縦軸・横軸の単位	○資料名 ○何の資料か	○資料名 ○何についての文章か
2	抽出	○量(多い・少ない) ○変化の向き ○変化の起点	○季節・年代・場所など ○物・人物の様子・建物・風景などの情報	○内容の読み取り。 (説明・願い・苦労など)
3	解釈	○資料の意義やねらい(・資料の価値はどの程度か・何を伝えたいのか・何を読み取らせたいのか)について考える		
4	関連付け	○資料と関連性のある事を考える ・既習事項との関連性(以前勉強した○○と関連がありそう) ・実生活で体験した事との関連性(私達の町にある○○と似ている)など		
5	疑問・推論	○資料から疑問を見つけ、根拠(既習事項・生活体験)をもとに推論する ・これはなぜだろう?(疑問) ・以前勉強した～と同じ理由かもしれない(推論) ・自分が体験した○○と似ているからきっと同じだと思う(推論) ・資料の○○と同じ理由だと思う(推論)など		
6	比較	○何が同じで何が違うか ○どれくらい(数値など)違うのか ○比較して分かることは何か など		

【筆者作成】

2 社会的事象を自分ごととして捉える活動について

(1) 社会的事象を自分ごととして捉えるとは

田中(2004)は、「社会科の基礎・基本の育成と定着を目指す方策の第1は、子どもの学ぶ意欲を高めていくことである」とし、「出会った対象に対して『不思議だ』『どうなっているのだろう』『このままにはしておけない』『調べてみたい』という気持ちを起こさせることが大切である」と述べている。児童の学ぶ意欲を引き出すには、児童が思わず身乗り出すような素材の準備や、出会いの演出など、教師の手立てや工夫が必要であると考え(図1)。

児童が学ぶ意欲を感じることは、対象となる社会的事象を自分ごととして捉えるだけでなく、学習への有用感を高めると共に、児童自身が試行錯誤をしながら継続して学ぶ力を身に付けていく事につながっていくと考える。

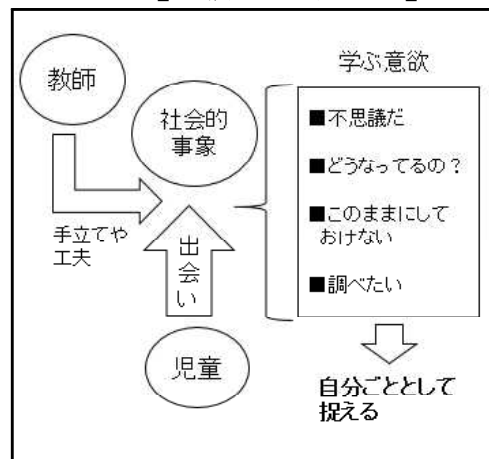


図1 社会的事象との出会いにおける学ぶ意欲(自分ごと)の獲得【筆者作成】

(2) 社会的事象を自分ごととして捉えさせる学習について

① 社会的事象と自分とのつながりを意識させる学習について

児童に社会的事象を自分ごととして捉えさせるためには、児童と社会的事象のつながりを気付かせる指導の工夫が必要となる。そこで、初めに社会的事象と自分との「直接的」なつながりについて、次に「社会的」なつながりについて段階的に記述させる。身の回りから順に視野を広げさせることで、社会的事象を自分ごととして捉えることができるようになっていくと考えている。

② 相互交流を通した学び合いと自分ごとについて

波(2000)は「意思決定を行うときは、プラス面とマイナス面を考えたり、そこにかかわる複数の人間の立場をできるかぎり客観的に理解し、そのうえで『では、自分はどうか』という決定を自らの責任において下していくことが必要になる。」と述べ、個人が自分の考えを自己決定していくプロセスが重要であると説いている。

そこで、児童が客観的な視点を持って自己決定ができるように相互交流の場を設定する。最初に個人で意見を持たせ、次に相互交流を行わせる。他者の意見などに触れながら最後は児童自身に自分の考えを自己決定をさせていく。

このとき、重要なことは児童に対し相互交流での具体的な視点を与えることであると考え(図2)。資料に基づいているか、お互いの相違点は何か、助言できる所はあるか等、視点を明確にした相互交流を計画することで、児童自身が自分の意見を深め、より良く自己決定していくことができると考えている。

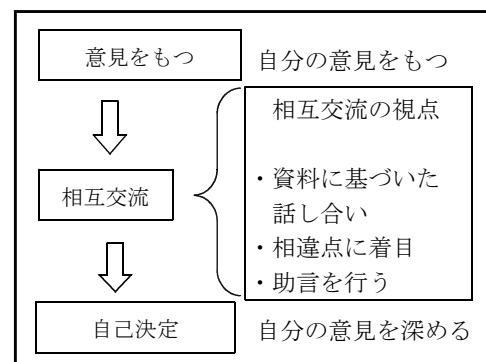


図2 相互交流の流れと具体的な視点

VI 授業実践(第5学年)

1 単元名 大単元3 工業生産を支える人々 小単元2 世界につながる日本の工業

2 単元目標

工業生産を支える貿易や海外生産のはたらきと、それらを通じた世界各国との結びつきについて調べ、その特色や課題を捉えることから、今後の貿易・海外生産の進め方について、考えをもたせる。

3 指導計画(全5時)

時	学習目標
第1時	日本の自動車の輸出の様子を調べ、工業生産における世界各国との結びつきについて関心をもち、学習問題を立てることができるようにする。
第2時	日本の自動車の輸出台数や海外生産台数の変化、世界に広がる日本の自動車工場について調べ、日本の自動車生産と世界の国々との結びつきについて考えることができるようにする。
第3時	日本の輸出入の状況を調べ、日本の貿易の特色を理解することができるようにする。
第4時	原材料の輸入や工業製品の輸出について調べ、日本の工業生産と貿易との関わりについて考えることができるようにする。
第5時	これからの貿易と海外生産の在り方について自分の考えを論述する。(本時)

4 本時の目標

これからの貿易と海外生産の在り方について自分の考えを論述する。

5 授業仮説

これからの貿易と海外生産について、自分ごとと捉えさせ、「6段階資料分析」の結果や相互交流を取り入れた活動を行うことで、日本と外国とのこれからの結びつきについての課題意識を持ち、自分の考えを論述することができるであろう。

6 本時の展開(5/5)

	学習活動	指導上の留意点
導入	1 前時までの学習の振り返り。 2 貿易が危機になった事例から貿易ができなくなるとどうなるかを考える。  3 課題を立てる。 目標：日本の貿易と海外生産について論述しよう。	○キーワードを使い既習事項を確認させる。 ○パワーポイントを活用し、日本の抱える貿易の問題点を確認させる。 ○自分の生活などを基に課題意識を持たせるようにする。 
展開	4 自由貿易についての考えを記述し発表する。 5 海外生産についての考えを記述し発表する。 6 グループを作り、相互交流を行う 	○自由貿易と海外生産について自分の考えを記述させる。 ○発表や相互交流の活動を通して論述へとつなげさせる。 自由貿易と海外生産についての配付資料 
まとめ	7 最終意見を記述する。 8 最終結果のそれぞれの意見を発表する。 9 今日の学習のまとめを行う。 10 今日の学習を振り返る。 まとめ：これからの日本の貿易や海外生産は、日本だけではなく、相手の国のことも考えながらバランス良く行うことが大切である。	○児童の発表をもとに、日本の自由貿易と海外生産について大切にすべき事へとまとめさせる。

Ⅶ 結果と考察

1 作業仮説1の検証

資料読み取りの場において、資料分析の視点を明確化することにより、資料を多面的・多角的に捉え、自分の考えを記述することができるであろう。

【結果】 本研究では、資料分析の視点の明確化と、社会的事象を多面的・多角的に捉える力を育成するために「6段階資料分析」を行った。

単元の導入では、児童に6段階資料分析説明書の配付とプレゼンソフトによる内容説明を行った。説明書は単元を通して参照させたことで、児童が円滑に資料分析に取り組むことができた(図3)。

単元終了後に行ったアンケートからは、分析、分類、解釈などの面で有用感を感じている記述が見られた(表3)。

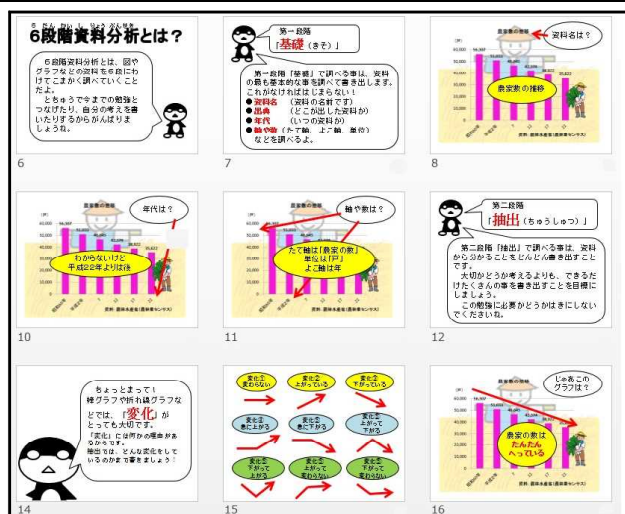


図3 6段階資料分析説明書の内容(一部抜粋)

(表3) 「6段階資料分析についてどう思いますか」という問いに対する児童の答え

- 資料をくわしく調べることが出来るし将来役立つと思います。(A児)…分析への有用感
- 資料を上手く分けることができてとても良いと思います。(B児)…分類への有用感
- 分からない言葉と同時に意味も分かるようになるから良いと思う。(C児)…解釈への有用感

児童のノートの記述からは、「6段階資料分析」の疑問・推論を行う活動において、分析した資料に対して疑問を持ち、他の資料や既習事項などを根拠とした自分の考えを持つことができていた児童の割合が、単元の前半では44%であつたのに対し、単元の後半では89%に増加していることが分かった(図4)。

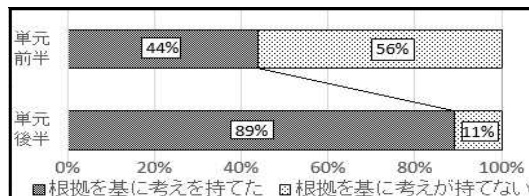


図4 疑問を持ち、根拠をもとに推論できたか

また、第1時と第4時の6段階資料分析の様子を比較すると(図5)、第4時は具体的な数値情報を抽出できるようになったり(図5①)、他資料との比較を通して気付く内容の数が増加していることなども分かった(図5②)。

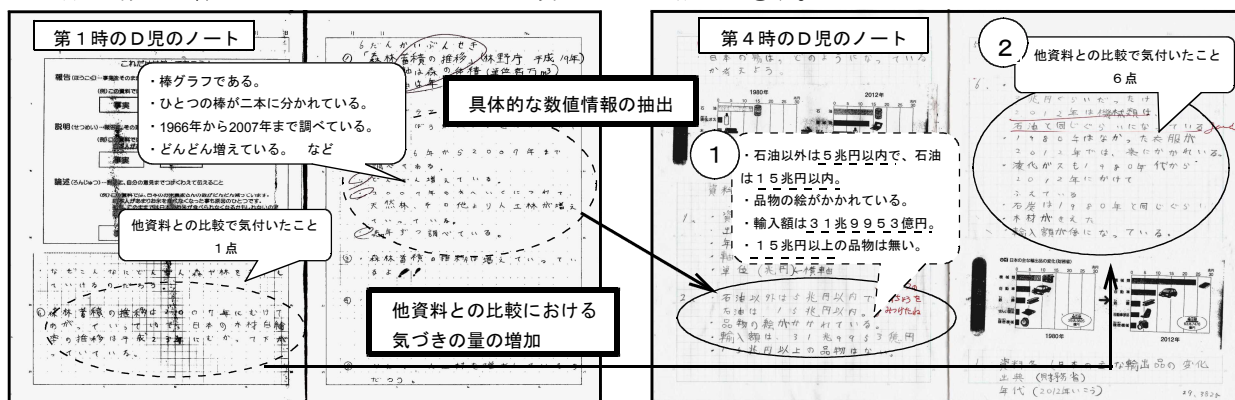


図5 6段階資料分析を記録した児童のノートの記述内容の変容(左:第1時 右:第4時)

【考察】 ノートの記述内容の変化からは、児童が「6段階資料分析」に取り組むことで、資料からの情報抽出や数値の変化への気づき、他の事象との関連性の考察や資料間の比較検討など、資料分析の深まりを確認する事ができたと思われる。

また、相互交流においても、単元前半では思いつきや予想などでの話し合いが多かったが、単元後半では、「根拠はどの資料?」、「前にやった食糧自給率の勉強で…」など、根拠となる資料や既習事項を取り上げて話し合う様子が見られるようになった。

学習後は「6段階資料分析」に対し、難易度と有用感を問う2つの選択肢から組み合わせを選ぶアンケートを実施した。

(表4) 6段階資料分析に対するアンケート結果

		後半 選択肢													
		情報に気付けな	役に立つ	役に立たない	考えをまとめる	考えをまとめる	意見を出さない	分かりやすい	分かりにくい	おもしろい	おもしろくない	もっとやりたい	やらない		
前半 選択肢	かんたん	1	1		4			3		2		2		13	
	むずかしい	2	10	1	4	1		3		2			1	24	
	べんり		8		1		3					1		13	
	ふべん		1							4				5	
	時間がかわらない		1							1		1		3	
	時間がかわる	1	3		3	1		3		8		2		21	
	量が多い		3		1	1	2	1		1				9	
	量が少ない							1						1	
		4	0	32	1	15	3	7	4	14	0	20	0	11	1
		アンケート項目「6段階資料分析は（前半選択肢）（後半選択肢）」における児童の分布（児童は2回選択）													

2 作業仮説2の検証

社会的事象を捉える場において、児童に自分とのつながりを段階的に考察させ、次に相互交流の場を設定することで、社会的事象を自分ごととして捉え論述できるであろう。

【結果】

児童が社会的事象を自分ごととして捉え、主体的に学習に取り組んでいくことができるように、個による学習活動と、相互交流による学習活動を設定した。

相互交流は互いの考えを練りあい、自己の考えを深める場と位置づけ実践を行った。

その結果、「論述すること」について「できる」、「まあまあできる」と肯定的に回答した児童は、単元前半では46%であったのに対し、単元後半には86%に増加した(図6)。

また、学習前と学習後に実施した「社会的事象を自分事として捉えること」に関するアンケートの結果からは、関連する4項目全てにおいて肯定的に答えた児童の割合が上昇し、児童の社会的事象への関心度が高まっている様子を確認することができた(図7)。

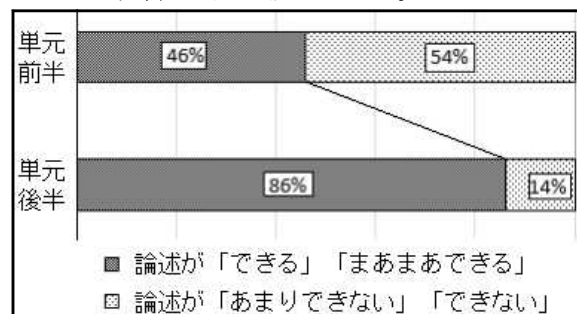


図6 論述についてのアンケートの結果

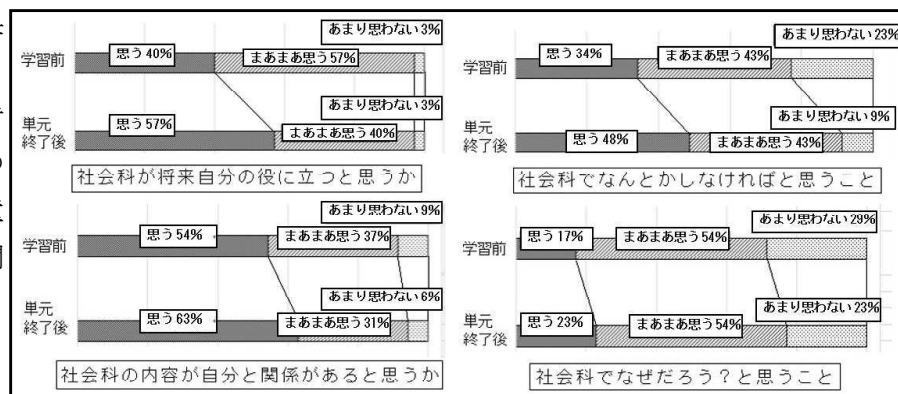
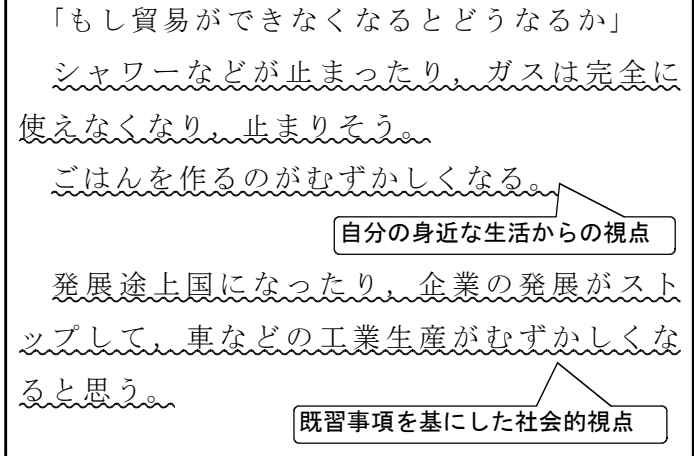


図7 「社会的事象を自分事として捉えること」に関するアンケート結果

【考察】

単元の学習が進むにつれて、児童は自分と社会的事象のつながりについて自分の身近な生活に直接的に関連することだけでなく、既習事項などの社会的に関連づけて記述するようになるなど、記述内容の深まりが出てきていると感じた。

児童のノートからは、検証授業の「もし貿易ができなくなったらどうなると思うか」という問いに対し、貿易という社会的事象をシャワーやガス、ごはんなどの身近な生活の視点で捉えた記述から、発展途上国や自動車生産など、これまでの学習で得た知識などを踏まえた社会的な視点にまで広げて記述することができている様子が見られた。



E児のノート記述内容

このような児童の記述内容の深まりは、個から相互交流へと学習形態が変化することが要因だったと思われる。

児童が自分だけの考えにこだわることなく、他者からの多様な意見に触れることのできる相互交流の場を設けた事で、友達の見解を取り入れたり、自らの考えを客観的に批評したり、繰り返し吟味したりすることができたと思われる。

しかし、社会的事象と自分とのつながりについて、自分自身の考えをまとめたり、記述する作業において、割り当てられた学習時間内に収めることにとまどう児童も見られた。

Ⅷ 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 「6段階資料分析」を活用することで資料分析力が向上し、社会的事象を多面的・多角的に捉え、自分の考えを論述することができるようになった。
- (2) 社会的事象を自分ごととして捉える学習を行ったことで、社会的事象と自分に関連づけた捉えが深まり、自分の考えを論述することができるようになった。

2 課題

- (1) 6段階資料分析に時間を要したため、記述形式や記述内容の改善が必要である。
- (2) 社会的事象を捉えさせるには、児童が自分と社会的事象とのつながりについて思考し、記述するための時間の確保が必要である

＜主な引用文献と資料＞

『小学校学習指導要領解説 社会編』	文部科学省	株式会社東洋館出版社	2008
『「言語力」をつける社会科授業モデル中学校編』	岩田一彦・米田豊	明治図書出版株式会社	2009
『社会の見方を鍛える討論の授業』	田中力	学事出版株式会社	2004
『意思決定の力がつく問題解決学習』	波巖	明治図書出版株式会社	2000